

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより



al museo
2018年3月20日

No.123



見晴らし台が築かれ、観光地として生まれ変わった府中御殿跡地(「武蔵府中国府台勝概一覧図」本館寄託)

もくじ

- 1-2 徳川御殿@府中
その肆…観光地化を図る
- 3 展示会案内
企画展 田村智久写真展「花の森八景」
- 4-5 NOTE 天正18年、六所宮兵火に遭う
- 6 たまがわ野鳥セレクション
⑧最後の大物一ツシ・タカ類参上
- 7 最近の発掘調査
鎌倉街道上道の支路を発掘
- 8 開館30年を迎えての…あれこれ
④今どきの地域博物館像

徳川御殿@府中

徳川將軍家は、鷹狩^{たかがり}などの際に休憩・宿泊する御殿を各地に設けていました。その一つが府中御殿です。長らく古記録や伝承でしか知ることのできない御殿でしたが、近年の発掘でその存在が実証されました。この御殿を取り巻く話題をお届けするシリーズの最終回です。

その肆…観光地化を図る

上の鳥瞰図^{ちようかんず}には、「府中御殿御旧跡 国府台^{こくふだい}」と名付けられた御殿跡地が描かれています。万延元年^{まんえん}(1860)頃、この場所の観光地化^{かんくうちか}が図られ、見晴らし台^{みはらしだい}(○印)が築かれました。その右側に描かれている、段竃^{よしづ}が立てかけられた建物は、酒亭でしょうか。踊っているような男女の姿も見えます。

徳川御殿@府中

その肆…観光地化を図る

府中御殿をテーマにおおくりしてきた本シリーズも、最後の回となりました。前回までの舞台は、府中御殿の造営から家康の神枢が宿泊する、16世紀末から17世紀初頭でした。今回は府中御殿の焼失を皮切りに、そこから200年以上、時計の針を進めてみたいと思います。

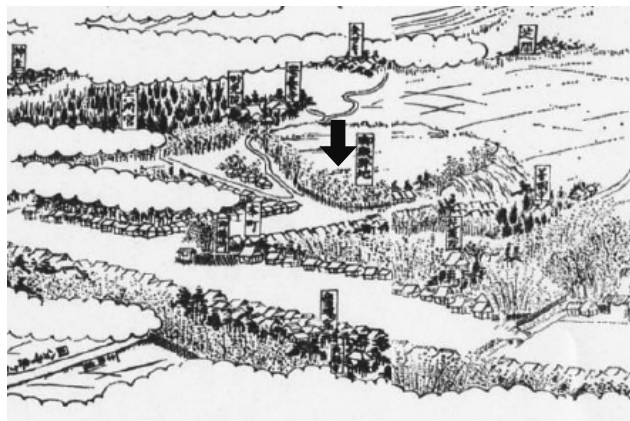
府中御殿が大火で焼失したのは正保3年(1646)のことです。時の将軍は3代家光、この頃府中御殿はすでに利用されなくなっていたようで、再建されることはありませんでした。

その後、御殿跡地は、古木が鬱蒼と茂る青々とした原野となっていたといえます。そこに最初の変化が訪れるのは、享保9年(1724)のこと。その2年前に8代将軍吉宗が新田開発奨励の高札を日本橋にたてたことを受け、この頃から武蔵野新田などの開発が始まるのですが、御殿跡地もその対象となったようです。この年、本町の住人に開墾が許可され、焼失から70年以上を経て、ほとんどが畑地となりました。

その場所にかつて府中御殿があったことは、地元で伝承されていましたが、江戸時代後期には、ただ広大な畑が広がるのみで、御殿の面影を見ることは不可能だったでしょう。実際、大田南畝や村尾嘉陵など、19世紀初頭に府中を訪れた主要な人物の紀行文には、御殿の御の字も記されていないのです。

このような中、府中御殿が再び着目されるきっかけとなったのは、幕府の命による地誌の編纂事業だと考えられます。寛政6年(1794)頃に成立した「四神地名録」や文政5年(1822)の「新編武蔵風土記稿」には、府中御殿が掲載されています。これは、幕府が徳川家の旧跡として御殿跡地を調査対象とした結果にほかならないでしょう。「新編武蔵風土記稿」の現地調査を担当した八王子千人同心の植田孟縉も、私に著した地誌「武蔵名勝図会」で、大きく取り上げています。

これらの地誌に記された府中御殿の情報は、六所宮(現 大國魂神社)や妙光院の西方にあり、広さは約6,000坪。西南は3丈(約9m)ほどの高い崖になっており、眺望が非常に良いとあります。もっとも広さについては、開発後の面積を



地誌に描かれた府中御殿跡地
『武蔵名勝図会』(1993年 慶友社)より

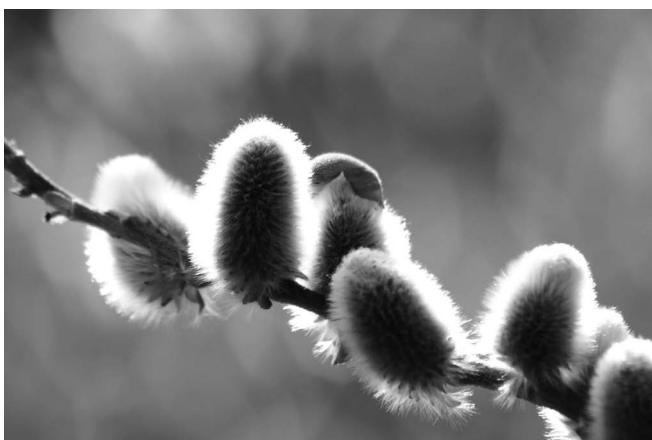
記した別史料に1町4反2畝27歩(4,287坪)とあるので、少し誇張されているようです。

さて、この御殿跡地には、もう一つの伝承がありました。古代ここは国司や国造の居館があった場所だということです。当時、各地の名所旧跡を巡る旅行が庶民の間で流行っていましたから、国府や御殿に関連する場所で、かつ眺望が良いとなると、観光地として売り出そうという発想が出てきても不思議ではありません。

その計画の中心となったのは、六所宮禰宜の織田兵部でした。万延元年(1860)頃、地元民と協力し、崖上に見晴らし台を築いて東屋を建て、近くにはお酒を出す店もつくりました(表紙写真)。また、この地の歴史を記した碑文の作成を、神主の猿渡容盛に依頼しています。さらに観光客が六所宮へ参拝後、直接足を延ばせるように、本殿の後ろから御殿跡に繋がる道を開き「府中御殿御旧跡道」と記した棒杭をたてました。

このように観光地化が図られた府中御殿跡地ですが、実際どれだけの観光客が訪れたのか定かではありません。多摩川や多摩丘陵が一望できたようですが、それ以外はただの畑地なのでから…。ただ、遊芸の振興と相まって、詩歌や俳諧の会が催されたことが記録に残っています。当然、その際のお題のひとつは府中御殿だったはず。当時の知識人が集まって、家康の御代に思いを馳せる…そんな場所となったのが、江戸時代後期の府中御殿跡地だったことは確かでしょう。

(花木知子)



作品名「北風と太陽」～ネコヤナギ～

当博物館では、広い敷地に植栽された四季折々の花々や木々が、訪れる多くの来館者の目を楽しませています。1月のロウバイに始まり、市の花・梅で賑わう2～3月はマンサク・サンシュユ・クサボケ・淡墨桜。桜満開の4月は、ヤマブキ・ユキヤナギ・ハナミズキ・ツツジ。新緑の5月には、ムサシノキスゲをはじめとするキンラン・ギンランなどの雑木林の植物。紫陽花が見頃の6月は、クチナシ・エゴノキ。7月～8月のネムノキ・スイレン・ユリ・サルスベリ。9月～11月には、ハギ・ヒガンバナ・キンモクセイ。紅葉で彩られる12月は、ロウバイとツバキ…これほど多様な植物が、1年を通して美しさを競っているのです。

そんな、郷土の森博物館の姿に魅了された一人の写真家が、田村智久氏です。氏は2001年に若年性パーキンソン病を発病し、商業カメラマンとしての活動を断念し、一度はカメラを置きました。しかし数年後には、治療の一環と考え、新たな写真活動を再開し、身近な府中の景色をSNSやフォトブックで発表してきました。近年、病気の影響から、年ごとに活動が制限されつつありますが、常にカメラを持ち歩き、写真の本質である「記録される瞬間」と人の心に「記憶される時間」の融合をテーマに、撮影を続けています。

当博物館の園内では、2009年から8年以上にわたり、雪の日も夏の暑い日も、花や木々のその時にしか見ることでできない貴重な一瞬をとらえてきました。

氏は「園内の花咲きほころぶ景色は、未来に残したい風景そのものであり、日常生活の中で出会う一期一会の瞬間こそ、自分のライフワークだと考

展示会案内

企画展 田村智久写真展

花の森八景

萌えさかる花たちを謳う

4/7 (土) – 6/24 (日)

会場：本館 2 階企画展示室

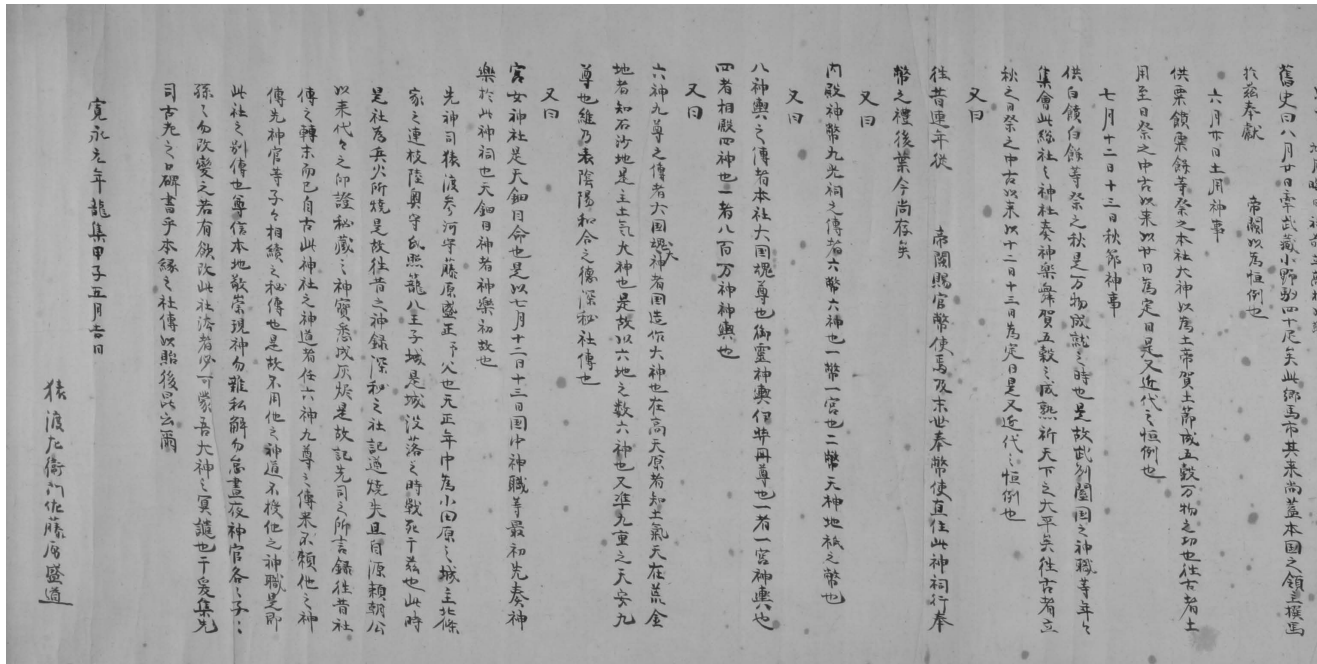
えている。時には車椅子で移動しながら、夫婦二人三脚の撮影活動となる。しかし、思うようにならない身体も、園内に入ると、森の不思議な力が応援してくれて自然とカメラを片手に動き回ることができる。膨大なエネルギーが自身に降り注いでいるイメージがある。心からこの素晴らしい環境に感謝したい」と、この博物館への思いを語っていただきました。

今回展示される写真は、誰も見たことがないような、この森の様々な表情をとらえた珠玉の作品となっています。心ゆくまでご鑑賞ください。

(本間隆幸)



作品名「サークラス」～ホトトギス～



「武蔵国総社六所宮縁起并社伝」(部分) 大國魂神社蔵

▼ はじめに

今年の 1 ～ 3 月にかけて、開館 30 周年記念として特別展「府中御殿@府中」を開催した。発掘を機に進んだ府中御殿跡の研究成果を、展示という形で紹介する企画である。

府中御殿は、奥州仕置を終えて帰京する道すがらの豊臣秀吉を饗応するために、徳川家康が造営したというのが定説である。しかし近年、秀吉自らが御座所の建造を命じていて、それが徳川將軍家の御殿に踏襲されたという指摘がなされている。その可能性は高いと判断するが、いずれにしても天正 18 年（1590）に建造されていることに違いはなく、この点に異論は出されていない。つまり、徳川將軍家が各地に設けた御殿のなかで、府中御殿の成立はひときわ早いのである。天正 18 年は、秀吉によって関東の覇者たる小田原北条氏が滅ぼされ、まさに戦国の世が終わりを告げた年である。府中御殿の建造はその直後。まさに歴史が大きく転換する中で生まれたといつてよいだろう。

この点を重視して、特別展では小田原北条氏と秀吉との対立から滅亡に至る経緯と、その時の多

摩の状況を描くことに相応のスペースを割いた。多摩では北条御一家衆の氏照が八王子城主として支配していたが、この城は豊臣の軍勢に攻められ、わずか 1 日で落城してしまう。6 月 23 日のことである。激戦が繰り広げられた八王子城の様子は、焼けただれた数多くのそして多彩な遺物が出土していることからうかがえる。

▼ その時、多摩、そして府中は？

それでは、多摩のほかの場所はどうだったのだろうか。天正 18 年の 4 ～ 5 月には、多摩地域の複数の郷村が秀吉から禁制を得ている。形勢不利とみた人々は、早くも秀吉から安全保障を獲得しているのである。しかしこれがすべてか。合戦は八王子城での出来事で、他所は平穏だったのだろうか。

この点を語ってくれる史料や記録はほとんどない。それでも、檜原城（檜原村）は、天正 18 年に落城した伝承を持つ。氏照が婿に入った大石氏の一族の居館伝承がある八王子市多摩ニュータウン No. 107 遺跡は、発掘調査によって 16 世紀末の廃絶が推測されている。けっして、無事ではなかったといえよう。しかしそれは、北条氏と

密接な関係のある城や居館の例である。

気になるのは府中である。北条氏が勢力を伸ばすなかで、政治的な地位こそ低下させていたとはいえ、すでに都市的な発展を遂げていた。戦いの場となってもおかしくない。

▼六所宮の焼失

実は、府中で合戦があったことをうかがわせる史料がある。六所宮（現 大國魂神社）の縁起（「武蔵国総社六所宮縁起并社伝」）である。

（前略）

先ノ神司猿渡参河守藤原盛正ハ予が父也、天正年中小田原之城主北条家之連枝タル陸奥ノ守氏照ノ為ニ八王子城ニ籠ル、是ノ城没落之時茲ニ戦死セシ也、此ノ時ノ社兵火ノ為ニ焼ク所、是ノ故ニ往昔之神録・深秘之社記適ク焼失ス、（後略）

これによれば、神主の猿渡盛正は八王子城に籠城して戦死、この時社殿も焼失したという。ただ、八王子城での北条方の戦死者は、八王子市の相即寺や大善寺の過去帳によって知ることができるのだが、そこに猿渡の名を見出すことはできない。1968年刊行の『府中市史 上巻』も、この点に関しては否定的だ。縁起の成立が寛永元年（1624）に下ることもあって、この記述の信憑性に疑問が持たれていたといっていよう。

ところが、展示会の準備を進めるなかで、この記述を傍証する史料があることに気づいた。六所宮の慶長の造営図である。家康は江戸へ入部した翌年の天正19年に六所宮に社領500石を寄進して保護するが、その後、慶長年間には大久保長安を奉行として社殿の造営を行わせている。竣工は慶長11年（1606）と伝えられ、この時の造営図が残されているのである。

注目されるのはその中央に描かれた楼門の注記である。

是ハ焼失不仕候へ共、かわら大破仕候付、自分ニかやふきニ致指置申候

とあって、楼門は焼け残っていたが瓦が大破していたため、かやふきに改めたことがわかる。つまり、楼門を除く社殿を焼失していたので造営が行われたのである。焼失の事由は明記されていないが、天正18年に兵火で焼失し、家康が再建したとみれば、辻褄は合う。

▼府中で討死？

もうひとつ。あきる野市にある大悲願寺の過去帳にも、いささか気になる記載がある。この過去帳は古い方から順に追記していく形式のものだが、その慶長7年の記載の頭注に

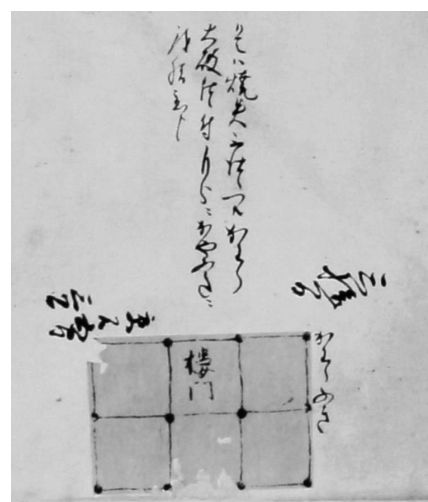
寅六月十五日賢心信士俗名高橋和泉ノ父、全徳信士俗名又兵衛寅六月十五日高橋和泉兄当国府中ニ打死

とあるのだ（『福生市史 資料編 中世・寺社』）。ほかの記載から高橋氏が当時、府中に居住していたことは確実だから、高橋父子は地元で討死したことになる。

この頭注が記された慶長7年は壬寅にあたる。したがって、高橋和泉の父兄はこの年に討死したとみるのが常識である。しかしながら、慶長7年に府中で合戦があったとは考えにくいのではないだろうか。八王子城落城の天正18年は庚寅で、高橋父子が討死した6月15日は八王子城落城のわずか8日前にあたる。そもそもこの過去帳は享保17年（1732）に書写されたものだから、誤写の可能性は否定できない。とすれば、本来、天正18年のところに記すべき事柄を12年後の慶長7年のところに誤写してしまったのではないか。もちろん憶測にすぎない。

この解釈の是非はともかくとして、六所宮の縁起の内容を裏付ける造営図の注記は、やはり看過すべきではないと思う。

六所宮は、天正18年、八王子城攻めの流れのなかで焼失したのであり、当然そこでは小規模とはいえ合戦があったものと推測される。府中はけっして平穏に新しい時代を迎えたわけではなかったといえよう。



六所宮 慶長造営図 複製（楼門部分）
本館蔵（原資料…大國魂神社蔵）

やまがし野鳥せしゅしょん



⑧—最後の大物— ワシ・タカ類参上

チョウゲンボウ
写真提供：影山昇（府中野鳥クラブ）

先の特別展「徳川御殿@府中」にも登場しましたが、江戸時代に徳川家康が鷹狩で帯同したオオタカやハヤブサは、見事な狩りの腕前を持つ猛禽類（ワシ・タカの仲間）です。大型で飛行技術に優れ、小動物や小鳥を捕食する彼らは、本来深い森林や広大な草原、険しい海岸沿いの断崖絶壁などを生活の舞台としていました。ところが、1980年代の半ば頃から、頻繁に東京23区やその周辺で確認されるようになり、多摩川にも出現の機会が増えてきたのです。

以前から多摩川で見られたのは、ハヤブサの仲間・チョウゲンボウです。元々は冬場に低地の農耕地や河川敷に移動し、小鳥やネズミなどを捕まえて暮らしていました。ゆえに郊外では普通の猛禽類でしたが、さらに最近は繁殖まで市街地で行い、一年中見かけることが多いようです。樹上や高い崖の代わりに高層建築物を利用し、そのてっぺんからドバトを狙って暮らしているというわけです。多摩川は、釣り人が放置したテグスなどにドバトの脚や翼がからまり、体の自由がきかない状態の獲物が定期的に出てくることによって絶好の狩場となっているようです。またハヤブサ類は、開けた場所から猛スピードで追跡して、空中でも獲物の鳥をキャッチする名人でもあります。逆にオオタカは、茂みに隠れたり木々の間を飛び回って不意に襲い掛かります。冬に多摩川を訪れるカモの群れなども最適のターゲットです。カモは陸や水上にいと狙われるため、猛禽類が飛来すると一斉に舞い上がるという防御策を取ります。但しハヤブサ出現の場合は、空中で捕獲される危険があるので、反対に決して飛び上らずじっとしていることが多いようです。

さて、1970年代までは都市部への出現記録がほとんどなかったオオタカですが、1980年くらいから年々増え出し、越冬期を中心に都内の大型

公園などに定着し、周辺でも頻繁に出現するようになりました。多摩川流域でも数か所の生息場所が見つっています。イヌワシやクマタカと違って、元来が里山に住むオオタカは、市街地、すなわち人間社会の縁にも適応する術があったのでしょう。ところが、自前で飼育に興ずる人がいたり、精悍なマスクと東洋的な色彩の美しさから剥製目当てに、営巣地から雛を奪う者が後を絶たず、当初は巣立ちが思わしくありませんでした。1984年に特殊鳥類指定を受けた後の保護運動を機に、多摩地域の繁殖も順調に増え、近隣都市への飛来が目立ってきたのです。

一方都市には、過去には考えられなかった様々な種類の鳥が入り込んでいます。本来生息していた里山を追われ、猛禽類より一足早く、代替と成り得る環境を整えていた都市に移動した連中です。都市河川である多摩川では、特に渡り鳥も加わる冬季、都市に集まった鳥たちを併せて、互いにエサを求めて陣地を取り合う様相です。ここに猛禽が割り込んで来るのですから、都市鳥先駆者のカラスにとっては迷惑でしょう。折角引越し先で築いたボスの地位を、従来の天敵襲来で寝首を掻かれる格好です。しかし、カラスもさる者、都市帝王の意地を見せ、本来は生態上位のワシ・タカを集団で攻撃するシーンを度々目にします。当館園内でも、丘陵地から追われ、カラスに撃墜されたオオタカ幼鳥の事例がある程です。



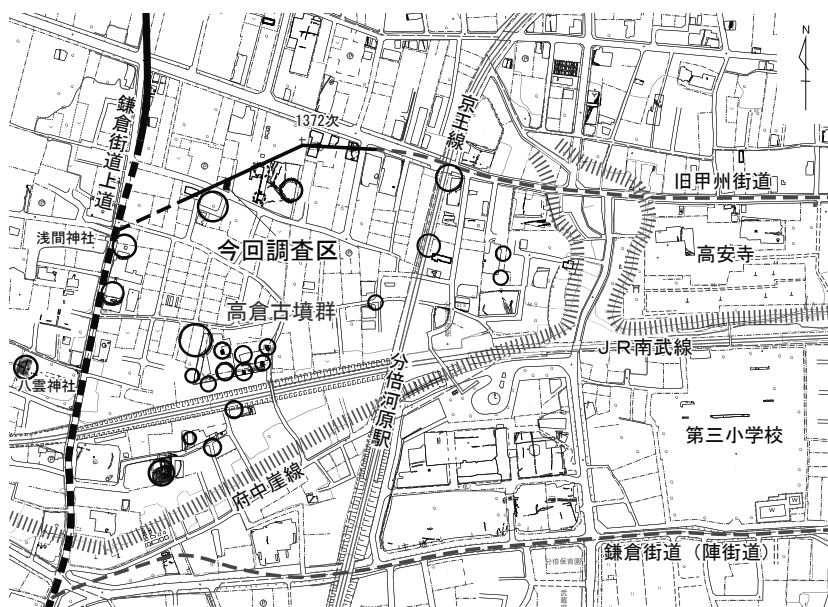
カラスに撃墜されたオオタカ

多摩川への猛禽類飛来は、真打ち登場の感ありです。現在の多摩川は山野の鳥が市街地経由で訪れ、冬場は季節限定の渡り鳥メニューまで楽しめる優良レストラン。彼らの営巣場所であろう近隣の丘陵地などからは、近くて便利な立地でもあるわけですから、自然の成り行きとも言えるでしょう。諸事情でひしめく鳥たちの多摩川梁山泊にワシ・タカ来訪！ 何のことはない、本来の里山生態系が場所を変えて丸ごと再現かとも思いきや、タカvsカラスのごとく上位の力関係で少々勝手が違う面が生じているのは、都市ならではの興味深い異変です。

（中村武史）

鎌倉街道上道の支路を発掘

美好町三丁目 府中市ふるさと文化財課 野田憲一郎



鎌倉街道上道は、分倍河原駅の西方約 300 m を南北に走り抜けていることが発掘成果で明らかになっています。今回は、この鎌倉街道上道から中世府中の中心部へ向かう支路と見られる道路跡を発掘しましたのでご紹介します。

発掘現場は、鎌倉街道上道の推定ラインから東へ約 100 m の所です。道路跡は南西から北東へ斜めに延びていました。幅約 4 m の範囲を 40cm ほど掘り下げて路面が造られていて、最下層の路面の西側には側溝が掘られていました。路面の下から 15 世紀後半に生産された常滑焼大甕の破片が出土していることから、それ以降に道路は開削されたと見ることができます。この道路跡に繋がると思われる遺構が 6 箇所で見つかっていて、それらを結ぶと現在の浅間神社付近から北東方向へ斜めに直進し、途中で東へ折れて旧甲州街道に合流するルートが浮かび上がりました。

では、この道はなぜ浅間神社付近から斜めに造られたのでしょうか。その理由は、美好町 3 丁目に分布する高倉古墳群に関係がありそうです。この辺りの発掘調査では地下に埋もれた円墳の周溝が多く発見されていて、斜めの道路跡は古墳集中箇所の外側に沿って造られているようです。中世には古墳の墳丘が数多く残っていて、それらを避けたルートが設計されたと考えられます。今回発見した道路跡は東側で現道の旧甲州街道に重なり、その先には鎌倉・室町時代に度々鎌倉公方の陣所となった高安寺や、本町や六所宮（現 大國魂神社）といった中世府中の中心部へと向かいます。

この道路が造られたころは、関東最大の内乱といわれる「享徳の大乱」もあり、陣所の置かれた府中の主要道路は軍事的に重要なものであったと想像できます。その反面、六所宮の北側では約 15 万枚におよぶ銭を納めた常滑焼大甕や舶来の磁器が出土するなど、経済的な発展を遂げていた様子も発掘成果から窺えます。今回発見した道路が繋ぐルートは、軍事・流通の役割を担う重要なものであったといえるでしょう。



発掘された道路跡

開館 30 周年を迎えての…



④今どきの地域博物館像

広い公園のなかに〈博物館〉があるのではありません。東京ドーム 3 個分の敷地全体が〈博物館〉になっています…。こんな説明をしながら、あっという間に 30 年が経ちました。展示と収蔵スペースからなるいわゆる〈博物館〉と、かつての街や村の景観を再現し四季折々の自然が楽しめる〈古民家園〉、それから天文学習のための〈プラネタリウム〉。この 3 つの要素が一体となった府中市郷土の森博物館の強みは、相乗効果と回遊性です。年間の入館者 30 万人という数字は、展示室やプラネタリウムだけの施設ではとても見込めないでしょう。これは歴史や科学に触れる機会を増やし、潜在的な利用者の発掘にもつながっています。「梅まつり」に足を運んだ方が、特別展「徳川御殿@府中」を見て帰っていただける、なんとありがたいことか！

さて、本コラムのこれまでの連載では、30 年目の課題として、①誰もが参加できる〈ユニバーサルデザイン〉、②〈森〉に関わる自然との共生、③〈資料〉を納める収蔵庫をとりあげました。①②は博物館全体に関わるばかりか社会全般のこれからの課題でもあります。③は博物館の存在意義に直結する問題です。4 回目は、博物館とそれを取り巻く社会である〈地域〉をキーワードにして、〈地域〉を活動の場とする博物館のあり方を再考してみます。

30 年程前には「地域博物館論」が話題を呼んでいました。地域の課題に博物館の機能を通して市民とともに応えていこうとする地域博物館がめざされました。こうした方向が利用者層の間口を広げ、事業の活性化を促し、行政や市民との連携が進み、結果として博物館の数が増えていったことは確かでしょう。その一方で日本中の〈地域〉は変貌していきました。大都市への一極集中や過疎化が極端に進み、市町村合併が大胆に実行され、大災害に見舞わ

れた地域も少なくありません。こうした状況下、地域のアイデンティティの再構築が叫ばれるなか、そこにも博物館の大きな役割がありました。地域の歴史・民俗・自然に関わる資料収集と調査研究を深め、その成果を地域内外に示し、地域のコミュニティの拠点のひとつとなるだけではなく、他地域からの観光誘致のスポットでもあり続ける、そうした地域博物館像追求のため博物館は今後も進化していくと思います。

かつての地域博物館論では、中央志向・観光志向と対比されて地域志向型が語られていましたが、今や国立館が地域密着をうたい、観光目的に公立館が設立される時代です。ターゲットは市民中心か観光客中心かの二者択一ではなく、地域の情報発信の拠点をどう博物館がつくっていくかの問題です。しかし、その場合でも、広範囲からの集客のためテーマの地域性を消すことや、効率化を理由に地域に通じない外部組織へ管理させることには賛成できません。

博物館が寄って立つところはやはり〈地域〉です。その〈地域〉をさまざまなレベルで想定しながら（近所の鎮守から宇宙まで！）、〈地域〉からの視点をテーマに、資料収集や調査研究、展示会や講座・体験学習を行い、その方法は市民参加・市民協働を取り入れていく。30 年前に市民と行政がつくってくれたこのユニークな博物館をこれからも活かしていくために、改めて考えたのはこのことです。（小野一之）



梅まつりでの太鼓・神輿巡行